

編集後記

第一回の研究集会は、37名の方々に集まっていただきました。文書館側の準備不足等があったものの、充実した内容の報告と活発な質疑応答がえられたことは、なによりの収穫となりました。報告者の石田雅春大学史資料室長、中生勝美先生、永島広紀先生、東山京子先生有難うございました。

大学アーカイブズは、多様な設置背景をもっており、それが個性ともなっています。また、学問の府たる大学では、公開した文書を教育・研究へと応用することが容易な点も特徴です。反面、アーカイブズが本来持つべき役割である「検証の器」としての歩みは、始まったばかりとも言えます。

本研究集会では、「個人文書の収集・整理・公開に関する諸課題」と題しました。個人文書の収集・整理・公開は、簡単なことではありません。研究の一環として、たまたま、関係資料が見つかったということもあるでしょうが、アーカイブズでは、それを体系的に、収集することで、その意義を持たせていきます。また、関係者との人間関係の構築は、長い信頼関係の上に成立するもので一朝一夕にはできないことなのです。その一端でも本報告書から読み解いていただければ幸いです。

また、昨今、機関アーカイブズである国立公文書館でも、その能力を超えた個人文書の収集・整理・公開をする意思を明らかにしています。公文書管理委員会でも、歴史研究者が自らの利益の拡大を図るような発言をしていますし、歴史学・歴史研究者とアーカイブズ学・アーキビストとのコラボなどと素朴に喜んでいる者もいます。しかし、その実態を知っているだけに、地獄への道は善意でしきつめられている・・・というような危機感を私は持っています。特に、個人文書を所蔵することによって国立公文書館の機関アーカイブズとしての意義が薄れていくことを危惧しています。

アーカイブズは、資料を所蔵していた人、大学の場合には、卒業生も含めた多くの学生の思い・・・その思いがつまった場所でもあります。単に利用者、特にハードユーザーである研究者や、一部好事家のためにのみ存在するわけではありません。それだけに、これまで収集・公開に努力してきた者として、昨今の「有識者」(?)の議論には、呆れることが多いのも事実です。

その一方で、大学文書館の運営は、厳しい環境のなかにあります。文化施設などとして埋没せず、検証の器としての立場を確立し、知の器としても機能する・・・大変、困難な道程ですが、その立場を堅持していきたいと考えています。今回の研究集会を通じて改めて、将来に向けたシステムの構築と、人材育成の必要性を痛感しています。

最後になりましたが、研究集会にお集まりいただいた方々、協力していただいたスタッフ各位に感謝いたします。有難うございました。

平成 28 年 3 月 10 日

小池 聖一